

7 イチジクの苗木育成時における施肥量

ねらいと成果

イチジクは通常挿し木で増殖するが、苗木の増殖に関するデータは少なく、挿し木後の肥培管理もほとんど明らかでない。そこで、不織布ポットに挿し木を行って苗木を育成し、施肥量が生育に及ぼす影響を検討した。その結果、ポット栽培で充実した苗木を育成するには、成分量3g以上の三要素肥料が必要であった。また、果実の収穫も可能で、施肥量が多いほど多収であった。

内容

1 材料及び方法

イチジク「柘井ドーフィン」1年生枝を供試し、1芽を残して15cm前後に切った穂木を、2005年4月19日に挿し木した(図1)。用土は真砂土とピートモスを等量混合し、容器は不織布ポット(20L)を使用した。また、pH調整のため、苦土石灰をポット当たり20g用土に混和した(pH約6.3)。施肥は、高度化成(N:P₂O₅:K₂O=15:15:15)を使用し、5月3日から9月6日まで2週間おきに計10回施肥した。試験区は、施用する各成分量がそれぞれ10回合計で0~8g/株になるよう、5区を設定し



図1 挿し木に用いた穂木

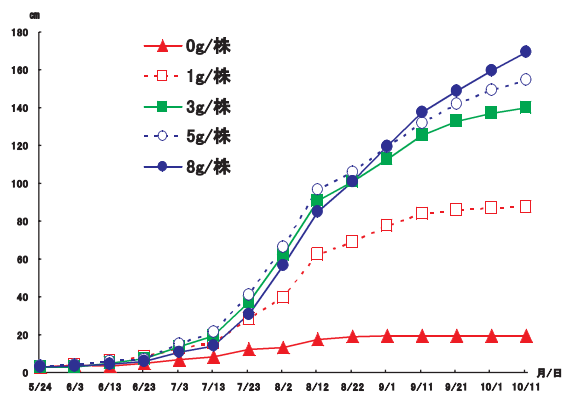


図3 施肥量がイチジク苗木の新梢長に及ぼす影響

た(試験規模:1区1株6反復)。

2 結果

挿し木後の新梢長は、7月下旬になると施肥量の多い3g以上の区で新梢の伸びが旺盛になった。一方、0g区では、新梢はほとんど伸長せず、1g区も短かった(図2、図3)。充実した部位(地上高50~60cm前後)を苗木として使用するためには、1m以上の伸長量が必要であるが、それが得られるのは、3g以上の区と考えられた。

果実は、0g区、1g区では全く着果しなかったが、3g区から8g区では着果がみられ、8g区の収量が最も多かった。各区とも果実は通常(70~80g)より小玉であったが、着色と糖度は良好であった(表)。

今後の課題

本試験では速効性の化成肥料を用いたため、持続しやすい緩効性肥料の検討も必要である。また、各肥料要素ごとの適正量も把握する必要がある。

真野 隆司(農業技セ・園芸部)

(問い合わせ先 電話:0790-47-2424)



図2 試験終了時の新梢伸長
(左から8、5、3、1、0gの各区)

表 施肥量がイチジク苗木の着果と果実品質に及ぼす影響

施肥量 g/株	果重 g	着色 カラーチャート	糖度 Brix	収量 g/株
0	-	-	-	-
1	-	-	-	-
3	35.1	7.5	16.5	58.5
5	37.1	7.4	16.3	253.7
8	43.2	7.4	16.5	351.3